

B 121 衣服のゆとり量の検討 —モアレ法による衣服空隙量— (第2報)

椋山女学園 大家政 ○中保淑子 富田明美

目的 衣服のゆとりに関しては、種々の角度から研究されているが、ゆとりを人体と衣服との空隙状況から追求したものは数少ない。私たちは、モアレ法によれば、人体と衣服との空間的位置関係が把握でき、かつ、パターンに組み入れたゆとり量が着装時に人体形態とどの様にかかわるかが解明できると考えた。第1報*では、生体を復元した石膏像を基体としてモアレ撮影の妥当性を検討し、体幹上部における空隙量の基礎的データを得た。引続き今回は、生体への応用を試み、被服の形態による空隙の変化状況について検討したので報告する。

方法 実験装置：格子投影型モアレカメラ FM-80。実験基体：成人女子2名の生体とそれを元に人体の左右非対称性を排除して作成した発泡スチロールによる体幹像1体。実験用衣服：基本の体表面を雲竜紙法により採取して平面に展開したもの(ゆとりゼロ)№1。後腋点直下線にゆとり量を導入したもの№2, №3。前・後腋点直下線にゆとりを導入したもの№4の4種。衣服形態：袖なし胴部衣服および袖付ウエスト切替ワンピース。そして、体表面と衣服表面に現れたモアレ縞から求めた等変形線より空隙量を算出した。

結果 人体と衣服との空隙状況は、着衣基体の形態が影響を及ぼすことが認められ、生体では、いずれのゆとり量設定においても左右非対称の空隙量が得られた。№1のゆとり量をゼロとした場合でも、着装時の前面では12～18mmの空隙が生じ、さらに、ゆとりをパターン上で後面のみに入れた場合でも、前面での空隙量が増加することが認められた。